ルドルフ・オットーと禅

— Geleitwort から —

木村俊彦

宗教学の方面ではこれまでの十数年に渉るテーマにしてきたルドルフ・オットーと禅に関わる研究を、今般小冊子に纏め、大東出版社から『ルドルフ・オットーと禅』というタイトルで出版した。幸い関係学者や禅界、またマールブルクから高い評価を受けた。今回はその出版に原典のまま復刻した、大峽秀榮 *ZEN, Der lebendige Buddhismus in Japan* (Gotha 1925) に対するオットーの薦引 (Geleitwort) を紹介し、その後の考察を補なう。

オットーは、ハイデルベルクの哲学科に学んだ「大峽による、以下に編集された禅テキストと、それに加えた彼の記述の大きな魅力は、ここで宗派の伝統と土壌から話していることだ。個々の記述に対する歴史的批判的考察がどのように起ろうとも、いずれにせよ我々はここに一級の自己供述を得たのである。ここで話しているのは長い体験と研鑽の中で同じく獲得した西洋的思考と方法論で彼の宗派の精神を把握し所有して、この殆ど理解し難い世界を我々に近づけてくれる、」と薦引(この表現は久松真一に依る) している。

すべてに仏心を見る禅の世界を、オットーの好きな芸術から水墨画にも認めている。万法帰一、それは仏心に帰するとし、最小の中に最大のものが、即ちすべてが如来で満たされている(禅の世界では考えている)し、そこでサンサーラはニル

ヴァーナであるという禅の世界観を読み解く。「般若心経」は謎めいた表現で「空」(gūnyatā = die grosse Leere) で満ちていると言うとする。初めオットーはこれを大乘仏教の神秘主義とし、ウパニシャッドやエックハルトと並ぶ神秘主義資料に入れた。やがて *statisch* な神秘主義と *dynamisch* な神秘主義に弁別し、シャンカラやプロチノスの前者と決別してエックハルトや禅のそれに親近するようになり、(上への開け) (*das Nachoben-Offene*) と言うようになる。(華園・日野・ハイジック共訳『西と東の神秘主義』三〇二—三〇五頁参照。)

オットーは後半で、武士道と禅という問題を取り上げる。それは当時ロンドンから粗忽谷快天が出した『侍の宗教——禅の哲学』にも由るが、しかしこの書をオットーは、著者の好みによつて、西洋哲学を借りた付会説になっていると批判した。

それよりもオットーは「バガヴァドギーター」のヨーガ説に禅のパラレリズムを求める。晩年(一九三五)に「ギーター」のドイツ語訳を出版している。ヴィシュヌ神の化身とされた軍師クリシュナが、戦地で親族との闘いにたじろぐアルジュナに、心の平静 (*samata*) をヨーガによつて保つように説教するのである。大乘仏教ではこの「平等心」を仏智と同一視し、禅では差別智と並べて「差別と平等」という風に表現する。アルジュナは、敵と味方を平等一味に見よ、という風に説く。「バガヴァドギーター」は大『マハーバーラタ』のごく一部ながら聖典視されて、ヨーガ道場では『ヨーガストトラ』よりもこちらを聖典としている。シャンカラは「ギーター疏」を著作して、ヒンドゥー哲学に大きな位置を占めた。

オットーは「ギター」が禪と違う所はその有神論であると
し、また敬虔主義もそこに認める。さて大峽はファウスト講師
の手を借りて、禅宗史を加えたこの書を帰国二年後(一九二五)
に出版した。謝辞にはハイデルベクのH・リツケルト教授や
マールブルクのオットー博士、友人のE・ヘリゲル等の名が挙
がっている。ヘリゲルは東北大学の哲学科外人教師として仙台
に赴任し、弓道を仙台で習って『弓と禪』(*Zen in der Kunst
des Bogenschessens*, 1948)の和訳がある書を残した(「禪」
は遺稿)。夫人は生け花と墨絵を習い、『生け花の道』が同じ稲
富・上田訳で出たという。大峽は始めに中国禅宗史を概論し、
年表を付けて六十頁に及ぶ。それから信心銘と証道歌に引き続
き無門関と碧巖録、白隠の著語を含む五位頌、十重禁戒、そし
て難透としての葛藤集の四則を、註付きでドイツ語訳した。

第十四部会

京鹿子娘道成寺における

聖なる女性についての一考察

東本 早紀子

「京鹿子娘道成寺」とは、有名な歌舞伎演目の一つである。
宝暦三年(一七五三)三月、初世中村富十郎が、江戸下り初御
目見得として初演した。歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」は、能の
「道成寺」を下敷にして創作された作品であり、それぞれ、道
成寺説話の後日譚である。歌舞伎と能は、日本の伝統的な舞台
芸能であり「道成寺もの」と呼ばれる共通した物語である。し
かし、両者を比較した場合、物語の主人公・清姫のイメージが
対極的に設定されているという点に大きな違いが見られる。歌
舞伎において物語の主人公・清姫は、聖なる女性の顕現である
のに対し、一方、能において清姫は、悪しき女性として描かれ
ている。「道成寺もの」の発端となった道成寺説話には、平安
時代中期の「本朝法華験記」「今昔物語集」、鎌倉時代の「元亨
釈書」、続いて室町時代の絵巻「道成寺縁起」などがあげられ
る。これらの物語には、それぞれ登場人物や描き方に若干異な
る部分は見られるが、共通した物語である。そして、道成寺説
話の後日譚である歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」と能の「道成寺」
も共通した物語である。しかしながら、能から歌舞伎に創作さ